

あなたの暮らしに七島イを

名人 松原 正・大分県国東市

聞き手 井上 京香・愛媛大学附属高等学校2年

■自己紹介

初めまして。名前は松原正です。

年齢は63歳、生年月日は昭和30年9月25日。あと10日で64歳になります。出身地はここ大分県国東市安岐町塩屋っていうところ。家族構成はね、今は私たち夫婦と両親の4人。あと猫が3匹。ちょっと前は子供が4人いたからね。なかなかにぎやかだったよ。25年前の農業を始めたころはね、9人家族だった。だんだん少なくなって今は4人になってしまったけどなあ。

■子供のころは

機械屋っていうか技術屋っていうか、まあ大雑把にひっくるめてエンジニアになりたいって思ってたんだよ。そのために機械科系の高校に通っていた。船を造る造船所の会社に入ったんだけど、船の仕事がだんだん減ってしまつて。だから今度はプログラムを書く「システムエンジニア」になつ

たんよ。かつこいい名前やろ？ だけど転勤もあるし1年のうちで3分の1以上出張とかでちょっと動けなくなつてね。それをきっかけに農業を始めた。めしました。

■七島イとの再会

うちが元々農家だったから、私が小さいころは農家っていったらこの辺りでは皆七島イを作ってたんだよ。七島イとお米、海岸に近い人は七島イと魚を獲ったり、山の上に住んでいる人は七島イとシイタケとか。地域それぞれで組み合わせで農業をみんなやってた。だから特別珍しいわけじゃなかった。何の作物をしようかなっていろいろ探したときにたまたま七島イの農家さんの話を聞くこともできた。それで20数年前は大分県の農業試験場で七島イの話をいろいろ聞いて、そのときにうちの田んぼの面積はあまり大きい方じゃないから少ない面積でたくさんの収益が得られるっていう話にまんまと乗せられて(笑)。

初めの方は他の作物も育ててただけだね。ああ牛もおったな。やけどもうちに一番適しているのが七島イかなっていうことで七島イを育て始めました。七島イ表って琉球表とも呼ばれているかな。まったく見たことなかったらやってなかったと思うけどね、子供のころ強制的に手伝いをさせられよったけん、だいたい見当がついたんだよね。

■1年のながれ

冬に何もない状態から七島イの1年が始まるんよ。「とこ焼き」っていう苗床の枯れた七島イを焼いて、そしたら地下茎は生きてるので新しい芽が出てくる。3〜4月は苗を育てる期間。次にその育てた苗を茎が2〜3本になるように株分けをする。土を落としたり、株を分けたり：全部手作業で行う。地道な作業やね。5月にやっと田んぼに植える作業をするんだけど、これも全部手作業。苗が大きいくん、機械が使えないんよ。稲と同じように植えていく。それから5月に植えた七島イを刈り取って収穫する。だいたいこの作業が8月くらいかな。6月半ばになったら田んぼ一面に七島イが生えている状態になる。そうしたら伸びすぎている先端を切ったり、折れんように網をかけてあげたりするんよ。8月に刈り取りの作業をするんだけどこれも全部手作業。お米みたいに機械で切れないんだよね。この作業がこれまた大変で：。そのあとに分割っていう作業。分割は七島イの茎って断面が三角形やけん、その1本1本を2つに裂く作業。これは機械でするんやけどね（笑）。

その作業が終わったら乾燥機で乾燥させる。昔は海岸の浜辺で裂いた七島イを乾燥させてたこともあったなあ。乾かす前は緑っぽい色だったのが青っぽいブルー味がかかった色になる。だから「青表」って呼ばれているよ。最後に七島イに命を吹きかける作業「機織り」っていう作業をするよ。3月下旬〜9月は田んぼで作業するのがメインで、9月以降は機織りがメ

インで作業をしてる感じかな。季節によって作業する場所が違うんだよね。

■過酷な1日

やっぱり収穫する時期が一番ハードやなあ。朝早くから夜遅くまで作業をする。1つの作業が遅れたら次の作業がすべて遅れてしまう。例えるならJ Rの時刻表みたいな感じ（笑）。

5時30〜45分、初めに作業場にある乾燥機を2時間セットする。それからだいたい8時まで田んぼで刈り取りをする。そのあと1時間くらいは朝ごはんの時間をとっとるんよ。

朝ごはんが終わって9時になったら乾いた七島イを乾燥機から出して振り回す。木製の踏み台みたいな箱に七島イの根元を打ち付けて下葉をとる作業を11時30分までにする。以前は木製の箱にはなく、それぞれの農家さんが持っている専用の石に七島イを打ち付けていたんだ。それから乾いた七島イを束ねて仕上げの乾燥を12〜13時の間の1時間する。昼休みはだいたい1時間半くらい取ってる。夏場は疲れて昼寝をしたりしとるよ（笑）。

15時前くらいに乾燥機から七島イを取り出して保管できるようにビニールに詰める作業をする。そのときに、同時進行で手伝いに来てくれる人が2人いるんだけど、その方たちに七島イを半分に裂く作業をしてもらっているよ。その作業を16時30分までします。乾燥機に七島イを入れたら1時間後に終了する。それから最後に夕方の方の刈り取りをしていく。これが終わるのがだいたい20時30分〜21時くらいかなあ。このスケジュールがだいたい1ヶ月半くらい続くんだよね。刈り取りの時期が終わったら計画的に織る作業に取り掛かっているよ。

刈り取りの作業は、私たち夫婦ともう一戸の農家さんとお手伝いさん2人の計6人で行ってるよ。

■相棒たち

七島イを栽培するときに使う道具…。基本的には普通の農家さんと同じようなものばかりなんだけど、特別なものもいくつかあるかなあ。「くわ」も苗を掘り上げて土を落とせるようなものとか「電動バリカン」で茎を揃えたりしているかな。「動力噴霧器」を使って液体の農薬を霧状に吹きかけたりもする。刈り取りのときは刃の短い専用の「カマ」を使って収穫をするよ。乾燥機も、七島イを横に寝かせて並べて乾燥できるように改造した乾燥機を使ってるよ。あとは「発電機」かな。田んぼには電線が通っていないから照明とかの電気として使っています。

機織り機も2種類あって半自動機織機と全自動機織機があるんだけどね、半自動機織機は1畳分ずつ織れる機織り機で全自動機織機は長い糸を巻き取るので長さは自由に決めれる機織り機。100メートルの畳が欲しいって



全自動機織機で織る松原さんと真剣な眼差しで見つめる七島イ農家を目指す研修生

いわれても全自動機織機なら織れちゃいます（笑）。全自動機織機は手がかからない面ではいいけど、半自動機織機は一本一本七島イを入れていくから面倒だけどいい味が出てくる。

■苦労すること

田んぼに苗を植えたり収穫したりする作業も全部手作業なのがしんどいかなあ。機械じゃないから腰が痛くなったりして大変なんだよ。あとは5月、6月、7月、8月の暑いときの外作業がしんどいかな…。とくに収穫時期は暑さで倒れそうになるよ。ショックなことは今まで大切に育ててきた七島イが台風の影響にあうこと。忙しいなかでも育った七島イが倒れないように網をかぶせたりロープでくくったり倒れないように工夫しているんだよ。

■やりがい

単純に七島イを育てることが面白い。過酷な作業が多くて体力はきついけど、七島イを自分で一から育てて収穫まで出来たらうれしい達成感がある。それにそれを使って畳表に加工する。そうしたら1つのもので2回喜びが感じられる。他の農産物とかではあまり味わえないんじゃないかな。「収穫する→加工する→お客様のものに出す」。やってることは古いかもしれないけど形態は先取りしているかな。

■お客様の声を聞いて

畳表をすべて織るのは大変で時間がかかるから織子さんに頼んで織ってもらってるよ。その織られた畳表を畳屋さんに送って畳という製品になって、お客様に売られていく。だから七島イが畳になって売られていくところを実際に自分の目でみるのができないのが七島イを育てているなかで

唯一の心残り。育ててきた七島イの最終形態をみるができないうもどかしさがあるね。それでも畳屋さんからお客様の声が届くことがある。「よかったよ」という声が入ってくると、とてもうれしい。そして「次はこうしよう」と考える。それを考えることがやりがいにつながるよ。でも、作る私たち側はこれがいいと思うってもお客様的印象とは違うこともある。お客様の声を聞きながら自分で織れたらいいんだけど…。それが出来ないのがとても歯がゆい。お客様との食い違いを少しでもなくすために、自分で畳を作ることは出来なくても畳表をサンプルとして渡したり、実際に畳表を売る畳屋さんの方に来てもらって手伝いをしてもらったりして七島イのことを知ってもらおう。そこで得た七島イの良さをお客様に伝えてもらおう。こんなふうに予想外をなくすために工夫しているよ。

■無駄にしない

七島イの収穫が終わって織り始めるときにやっぱり畳表に不適な七島イが出てきちゃう。短すぎてもダメ。太すぎてもダメ。細かいことかもしれないけど納得のいく畳表を作り上げていくために選別することは大切なんよ。そこで不適だって選別された七島イはどうしているかっていうとね。捨てちゃうもったいないしそれで終わりじゃ面白くないでしょ。だからその七島イを使って円座や草履とか…工芸品にして違うかたちで命を吹き



七島イの畳表と松原さんの手

かけていく。今、私が履いている草履も椅子に敷いている円座も畳表には不適だった七島イたち。七島イってこんなにもいろいろな使い道があっているんだよ。素敵でしょ。今はね、国東七島イ認定工芸士や七島イ作家っていう人たちもいて国東半島全体で七島イの魅力を伝えることに力を入れているよ。

■後世に継ぐ

最近農業の後継者が少ないことが

問題になっているでしょ。七島イ栽培も他人事じゃないんだよ。10年くらい前は七島イ栽培している人も70歳以上の人ばかりだった。最近は人数は少ないけど若い世代の方たちが七島イ農家として入ってきてくれている。もっとたくさんの人たちに七島イと触れ合ってほしい。だからこそ今、七島イ栽培をしている私たちがしなければいけないことは七島イについて多くの人に知ってもらうこと。畳といえば、もしかしたら蘭草を想像する人が多いかもしれない。蘭草にもいいところがたくさんある。でも七島イにしかない良さを知ってほしい。例えば七島イ特有の香り。気持ちが和むよ。それと七島イは蘭草に比べて物持ちがいい。七島イは蘭草よりも耐久性が5〜6倍強い。県外からも七島イ栽培に興味を持って勉強してくる方もいる。ちょうど今関西から七島イ栽培の勉強をしに来てくれている人もいる。あとは「くにさき七島イ振興会」という組織もあって七島イの認知度を上げるために日々頑張っているよ。七島イ産業の未来を明るく照らす一歩に少しでも私にできることがあるのなら地道なことかもしれないことにも



七島イでミサンガ作り

一生懸命励んでいきたい。

〔取材日…2019年9月15日、10月20日〕

【参考資料】

『七島蘭 全ての琉球畳のルーツがこの国東にある』くにさき七島蘭振興会

【聞き書きを終えての感想】



私が聞き書き甲子園という言葉に耳にしたのは去年の冬。部活や勉強、多忙な学校生活を送るなか、一つ一つのことが中途半端な自分が嫌でした。「変わりたい」「自分自身の視野を広げたい」そう思っていたときにこの聞き書き甲子園に出会いました。この取り組みに参加して七島イの良さを知っただけでなく、「松原正さん」という一人の素敵な方のこれまでの人生を覗かせていただくことができました。故郷の伝統的な産業、七島イを育てているだけでなく、たくさんの人に知ってもらおう振興会に参加していると聞き、故郷に貢献しているのだとても感慨深くなりました。私は今まで自分自身のことに必死で周りの人たちのことに気持ちを向けることができていなかったと思いました。松原さんと出会い、故郷のため、次世代を担う人たちのために取り組むことがどれほど大切か知ることができました。将来、私が家を建てる機会があればひ畳を、七島イの畳表を生活の一部に取り入れたいです。



profile

松原 正

まつばらただし

昭和30年9月25日・64歳

職業：七島イ栽培

【略歴】 大分県国東市安岐町塩屋出身。システムエンジニアとして各地を転々としていたが約28年前に転職として故郷の国東に戻り、七島イ栽培を始めた。幼いころから身近にあった七島イを自らの手で育てていくことの生きがいを見つけ、ただ七島イ栽培をするだけではなく七島イの良さを伝え、後世に継ぐ試みをしている。